



アンネのバラ

吉高人権だより

2023年 9月号

愛媛県立吉田高等学校 人権委員会発行

コンプレックスと向き合う

芸術科 榎 なつ美

私のよく知っている、ある女性の話をしましょう。

彼女には、かつて嫌いなものがありました。それは自分の“声”でした。

小学4年生の頃、彼女は自分の話す姿が撮影されたビデオを視聴し、自身の話す声がクラスメイトよりもはるかに低くかすれていることに気づき、大きなショックを受けました。それからというもの、音楽の時間に歌を歌うことが怖くなってロパクでやり過ごしたり、それまでは好きだった人前に出て話すことが何となく苦手になったりと悩みは深まり、辛い毎日を送ることになってしまいました。

中学生になった彼女は、合唱部に入ることにしました。彼女の通う中学校には、文化部がひとつしかなかったからです。歌うことは嫌いでしたが、運動をすることはもっと嫌だった彼女は、仕方なく入部を決めました。早々に行われたパート決めで、顧問の先生から「あなたの声はソプラノだ!」と、なぜだか断言された彼女は、しゅしゅ高い声で歌う日々を過ごしていました。不満と不安を抱えながらも、幸いにして持ち合わせた音感と負けん気の強さを頼りに休まず練習し、気が付くと部長としてリーダーシップをとり、全国大会に出場するまでに歌うことが好きになっていました。自信を持った彼女は、高校でも合唱を続け、大学の声楽専攻を卒業し、現在音楽教師として教壇に立っているそうです。自分よりも体の大きな子どもたちを相手に奮闘する日々、もちろん彼女の声は低くかすれたままですが、今ではそれも持ち味では?とすら思うようになり、幸せな毎日を過ごしているようです。

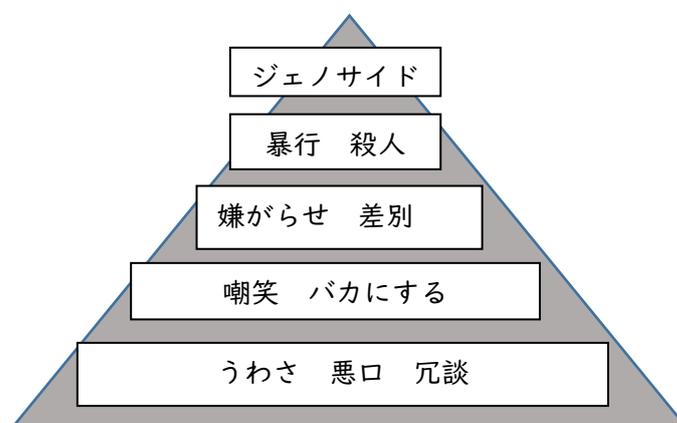
みなさん、何か一つくらい、コンプレックスを感じることはありませんか? 私は身長がもっと伸びればいいなと今でも思うし、せめてもう少し速く走れたらいいなとか、考えればきりが無いほどたくさんあります。大人への階段まっしぐらの皆さんは、自分の容姿、学力、置かれた環境…など、さまざまに思うことがあるのではないのでしょうか。この女性のように、自身のコンプレックスとうまく向き合える例は多くないかもしれません。ですが、彼女にとっては顧問の先生の「あなたの声はソプラノだ!」というたった一言がそうであったように、前を向いていれば、自分の生き方を変える何かに出会えるかもしれません。どんなときでもふて腐れず、ゆっくりでも歩みを止めないで過ごしたいものですね。

【人権アップデート】。

みなさんは「マイクロ・アグレッション」という言葉を知っていますか。今初めて聞いたという人がほとんどではないでしょうか。マイクロ・アグレッションとは、直訳すると「小さな攻撃」という意味ですが、無意識な偏見や思い込みが言葉や態度に現れ、否定的なメッセージとなって伝わり、意図せず誰かを傷つけてしまうことだと言えます。多くは日常生活の中の些細な言動であり、本人には悪意はなく、否定的な言動をしている自覚もありません。

例えば、「障がい者なのにがんばっているね」「高齢者に IT は難しいね」「女子なのに数学ができるね」などがそうです。これらの言葉は裏を返せば「障がい者は常に弱者である」とか「女子は数学ができない」などの思い込みや決めつけが隠れているようです。それらの思い込みや決めつけが他人を不快にさせることもあるのです。カメルーンで生まれ、日本で育った星野ルネさんは著書「まんがアフリカ少年が日本で育った結果」の中で、「(本人の外見がアフリカ系国人だから)思ったより足が速くないんだね」とか「日本語が上手ですね」と言われて傷ついたことを紹介しています。(『まんがアフリカ少年が日本で育った結果』は本校図書館にあります。)

マイクロ・アグレッションになぜ気をつけないといけないかというのは、それがエスカレートするとひどい差別につながっていくからです。下の図のようにマイクロ・アグレッションは差別の最下層の下支えになっています。かつてアフ



差別のピラミッド (大東文化大学渡辺教授による)

リカのルワンダで内戦と虐殺が起りましたが、その発端はラジオで放送された対立する民族への悪口だったことが知られています。

マイクロ・アグレッションは言った本人が気づくのは難しいです。また、同じ言葉でも人によって受け取り方は違うので、完全に防ぐことは難しいです。でも、何気ない言葉が他人を傷つけることがあるかもしれないという自覚を持っていることは大事なことです。2学期になって体育祭や文化祭、修学旅行など行事が連なっています。日頃の言動に少し気をつけて日々を過ごしていきましょう。